

住宅リフォーム助成継続などを評価し、一般会計予算に賛成 国保、介護保険特別会計予算など6議案には反対

3月定例議会は、地震対応などのために一般質問を中止したことにより、予定よりも3日早い22日に閉幕しました。

この日は常任委員長報告、討論などを行い、上程された議案の採決を行いました。いずれも賛成多数、または全会一致で可決されました。

日本共産党議員団は昨年引き続き、今回も新年度一般会計予算に賛成しました。

日本共産党議員団を代表して討論に立った上野公悦議員は、「東北地方関東大震災や上越市内にも大きな被害をもたらした長野県北部地震、福島第一原発事故による被災者受け入れなど新たな状況の中で、市民の暮らしと安全安心、市内経済の活性化と雇用をいかに守るかという点に施策がシフトされることが重要」としたうえで、新年度一般会計予算は「市民生活を守るための施策を複数にわたって実現する予算案となっている。不十分な点もあるが、この点を評価し、賛成する」とのべました。

私たちが評価した施策のうち、上野議員が具体的に示したものは、①通院医療費の小学校卒業



業までの助成拡充、②住宅リフォームへの補助による市内中小業者の仕事づくり支援、③PTA会費などを対象に加えた就学援助制度の拡充、私学への運営費助成や保護者への学費補助の拡充、④集落支援員の増員など中山間地支援策の強化、⑤国民健康保険特別会計への3億円の繰り入れ、の5つです。

学校給食民間委託の推進など問題点も指摘

一方、新年度予算にはいくつかの問題点が含まれているとして、具体的に指摘しました。

その中身は、①合併前上越市の地域事業費枠の管理の在り方が問われている時に、旧第四銀行高田支店活用事業の事業内容に大きな変更があるにもかかわらず地域協議会に諮問しないで予算案に計上したこと、②学校給食民間委託推進の姿勢を変えておらず、新年度も数校にわたって拡大していること、③(仮称)厚生産業会館について、整備基礎資料の作成を外部に委託する予算が計上されているが、本来ならばその前に建設の可否を含めて、市民の意見を聞いて進めるべきであったことなど4点です。

国保税は負担の限界を超えている

平良木哲也議員は日本共産党議員団を代表し、新年度国民健康保険特別会計予算など6つの議案に対し、反対討論を行いました。

このうち、新年度国民健康保険特別会計予算については、「一般会計からの3億円の繰り入れを行って保険税負担の軽減に努める姿勢は大



上越市は約43万錠のヨウ素剤保管

上越市はいざという時に備えて、診療所などで安定ヨウ素剤(ヨウ化カリウム丸)を42万8000錠(平成21年2月現在)保管しています。これは旧吉川町が取り組んでいたもの。合併で新市全体に広がりました。

いに評価するところだが、保険税負担そのものの現状は、すでに市民の負担能力の限界を超えている。あらゆる手段を使って市民の負担軽減を図るべきところ、逆に保険税を平均3・6%引き上げたのは市民生活を守る立場から認めることができない」とのべました。

新年度もまた保険料を引き上げるとした新年度介護保険特別会計予算についても、「市民にとっては3年連続の引き上げという重い負担増になる」とのべ、反対しました。

新年度後期高齢者医療特別会計予算については、「この制度は年齢で人を差別するというあってはならない制度。一刻も早く無条件に廃止することが必要だ。こうした制度の存在を前提にした予算は承認できない」とのべました。

上越市オンブズパーソン条例の一部改正については、オンブズパーソンを1名にすることができるようにしたものです。平良木議員は、「オンブズパーソンの職務は、市政運営に関する苦情の申立てを受け付け、必要な調査を行い、迅速に処理すること、市政運営を監視し、自己の発意に基づき、事案を取り上げ調査することなど4つある。今回の条例改正によって、こうした職務を遂行する体制が弱体化すること必至だ」とのべました。

このほか、母子及び父子福祉金支給条例の一部改正についても、「より手厚い支援が必要」とのべ、反対しました。

早いものですね、義父の四十九日法要が先週の日曜日になりました。亡くなった時には屋根や庭に雪がたっぷりあったのに、いまは裏庭に少し残っているだけです。この日はとても穏やかで、黄色い花を咲かせたばかりの庭のスイセンも気持ちよさそうに見えました。

義父とは三〇数年の付き合いをさせてもらいました。地元商工業の発展のために力を尽くした人であることなど、世間に知られていなかったことはある程度分かっています。が、私的なことは正直言ってあまり知りませんでした。それだけに、四十九日になって初めて知った事実にも動かされました。

義父の家に入って後飾り壇まで行き、焼香しようとしたところ、壇の左側に一通の手紙が置いてあるのが目に留まりました。日付は葬儀が終わって数日後ですが、宛先には義父の名前が書かれています。疑問に思い、封書の中身を見せてもらいました。便箋には毛筆による美しい文字が並んでいて、「生前のご厚情に感謝の意を込め、心からお悔やみ申し上げます。ご葬儀に参列できませぬ事をお許し願います」と書かれています。

差出人は義父が一五年間通った公民館の歴史教室の先生。すでに九〇代に入っておられるとのこと。先生が、こうした手紙をくださったのは理由がありました。歴史が大好きな義父は、歴史教室の級長をずーっと務めていたのです。義父が趣味の世界でもまとめ役をしていたことを知り、なぜかうれしくなりました。

海の見えるホテルでお斎をいただいている時には、義父の従弟であるTさんが少年時代の思い出話をたくさんしてくださり、その中に義父のことが出てきました。Tさんの嫌みのない自慢話、ユーモアたっぷりの、懐かしい思い出話には何度も笑いこけました。

「昔、明神に六本松スキー場というのがあったんだ。でっかい松が一本あっただけだけど。いまのうちに言うとかけど、そこはすごいスロープだ。そこでよく回転競技をやっていた。赤倉のスロープよりいいですよ、あそこは。とにかく急なんだ。そこをおれは滑ったんだ。六年生の時、おれは代表選手だった。もっとも、一度も入賞したことがないけど」

妻がそこで口をはさみ、「でもうちの父はあんまり運動神経良くなかったような気がするんですけど……」と言うと、「そうだね、スキーでなかったね」。こんな調子で答が返ってきました。義父は、スポーツはあまり好まなかったようです。でも、三人の子どもたちが長靴をはいてスキーに乗っていた時には、靴が外れないようにと、皮のバンドなどを何度も直してくれたといえます。これも初めて聞いた話でした。

お斎が終わり、柏崎の家に戻ってから、義兄が裏山を案内してくれました。義父が植えた雪割草を見せてくれるというのです。杉やモミジの木の下に白や薄紫の花が見事に咲いていました。義父が庭木に関心あることは知っていましたが、私と同じく野の花にも強い関心を持っていたとはびっくりでした。

この日、義父は集落の中心部にある共同墓地の墓に入りました。地元のしきたりに従い、手づかみで骨を墓の中に入れ、最後の別れをしました。納骨の時、ふと思いついたのは正月に見舞った際、身振り手振り、「お墓に行くことになる」ことを私たちに知らせた義父の姿です。もう一回、義父と話をしたくなりました。

信越本線の強風、雪害対策強化を



市議会総務常任委員会で私は11日、信越本線の強風対策、雪害対策についてJR東日本に働きかけるよう求めました。市は今後、関係市や隣接の長野県とも

力を合わせて対応していきたいとのべました。

再び大島区・安塚区で現地調査

日本共産党議員団は21日、大島区菖蒲地区、安塚区須川地区を再度訪れ、現地調査を行いました。今回の目的は、雪崩など二次災害発生の可能性の確認と水道などの復旧状況を見ることにありました。

菖蒲地区の牛ヶ鼻。ここでは、積雪のため水道管の破損箇所を特定できず、黒いパイプを使った仮復旧となりました。雪の上を這わせての配管です(写真)。ここでは雪崩の危険箇所も確認してきました。パトロールの強化、雪庇落としなどの強化が必要です。

安塚区のキューピットバレイでは復旧作業が急ピッチで進められていました。



力を合わせて対応していきたいとのべました。

私がこの問題を取りあげたのは、電車通学、通勤をしている人や保護者から、「市議会でも問題にして、改善を」と要請されたからです。「現在、運行されている電車は風に弱い。雪に関しても昔に比べてすぐ運休する。こんな運行状態だと通勤・通学には使えないという声がある。ぜひ、関係市ともタッグを組んでJR東日本に働きかけを」と訴えました。

市が明らかにした信越本線の運休状況は、本年の1月の場合、直江津一長岡間で66本、直江津一長野間で206本にものぼります。いずれも強風や積雪によるも